氏　　名	賀　馨
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 6404 号
授与報告番号	甲第 3651 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第4条第 1 項該当者
学位論文名	**回復期リハビリテーション病棟の空間がリハビリ以外の時間帯の身体活動に及ぼす効果に関する研究** （A study on the effect of the space of the convalescent rehabilitation ward on the physical activity out of their private rehabilitation times）
論文審査委員	主　査　教授　森　一彦　　副　査　教授　岡田　明 副　査　教授　小伊藤　亜希子　　副　査　教授　三浦　研　（京都大学）

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は，個室ユニット型の空間構成を病棟に採用したＳ回復期リハビリテーション病院(以下，回復期リハ病棟）を主な調査対象として，病棟の空間のあり方がリハビリ以外の時間帯にどのような身体活動を患者にもたらすのか，他の一般的な回復期リハ病棟との比較から明らかにしたうえで，回復期リハ病棟に求められる建築計画のあり方を提示することを目的として取り組んだ研究であり，全５章で構成されている．

第１章では，回復期リハ病棟の制度化の背景，整備基準等を概観したうえで，先行研究を整理し，本論文の位置付けを示している．

第２章では，個室ユニット型の空間構成を採用したＳ回復期リハ病棟を研究対象として，患者 13 名の過ごし方を歩数と運動強度に基づき詳細に分析している．その結果，昼間の２／３の時間を過ごす病室を中心とした空間のあり方が患者の身体活動に大きな役割を果たす実態を明らかにしている．また，移動や昇降，姿勢の変化を促す空間上の仕掛けや工夫が，リハビリ以外の時間においても運動強度を発生させることを示している．

第３章では，　Ｓ回復期リハ病棟と同程度の室料を設定する大阪府内の他の３病棟の合計４病棟を対象として，病棟の運営方針，病室の環境，設備の違いが患者の持ち込む物の種類，過ごし方に及ぼす影響をアンケートに基づき分析している．その結果，空間構成や環境，設備の違いのあり方がモノの持ち込みに影響を及ぼすが，それ以上に病院側のモノの持ち込み制限のあり方が患者の過ごし方に強く影響する実態を明らかにしている．

第４章では，３章で明らかとなった病棟の運営方針による影響を除き，病室の環境，設備の違いに起因した患者の身体活動の差を明らかにするため，Ｓ回復期リハ病棟と同じ医療法人が運営する，大規模なリハビリ室を有し，多床室を中心としたＨ回復期リハ病棟を比較対象として，同程度の機能的自立度の患者６名ずつを選定したうえで，リハビリ以外の時間帯の行為，歩数，運動強度に着目して比較している．その結果，同一法人が経営する２つの回復期リハ病棟では，個室と多床室の違いが，患者のリハビリ以外の時間帯における歩数には違いが見られないが，運動強度に差を生じさせること，すなわち歩行を伴わない身体活動に差を生じさせる実態を明らかにしている．

終章では，前章までの分析・知見を基に，望ましい回復期リハ病棟のあり方について総括し，病院側の入院時のモノの持ち込み制限を少なくし，リハビリ時間以外の患者の活動性を高めることの重要性を指摘している．そのうえで，建築計画のあり方として，病室を他人に気兼ねの少ない個室として整備すること，個室として整備できない場合でも，多彩な活動を可能とする空間的な広さ，机，収納の確保や洗面などの設備の設置，さらに，患者の移動や昇降，姿勢の変化を促す仕掛けや工夫を設け，日常的に動きを作る空間を確保することが，リハビリ以外の時間帯の患者の身体活動を活性化させるうえで重要であることを指摘している．

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，個室ユニット型の空間構成を先駆的に取り入れた回復期リハビリテーション病棟と一般的な回復期リハビリテーション病棟との比較から，病室を中心とした空間の違いが患者のリハビリ以外の時間帯における身体活動に及ぼす効果を行為，歩数，運動強度から明らかにしたうえで，望ましい回復期リハビリテーション病棟の建築計画のあり方を提示している．よって，審査委員会は本論文が博士（学術）の授与に値するものと認めた.